

研究報告

美術グループ研究報告「美術教育を多様な視点から捉え これからの教育を考える研究会」報告

湯浅 大吾

北翔大学教育文化学部教育学科

抄 録

本稿は、2022年10月9日、10日に「ポルトギャラリー」（札幌市・北翔大学北方圏学術センター内）において開催した、本研究グループ主催による実践報告・講演・見学会の概要報告である。これまで、本誌6号から9号までに記載してきた報告に続くものである。

幼稚園・小学校・中学校（含む免許外美術担当）高等学校・高等専門学校・大学の各教員、教育番組制作・社会教育・アートコミュニケーター・作家など多様な立場からの美術教育に関わる実践発表・交流が行われた。

本研究会を通して、多角的な視点から美術教育を問い直し、育まれる資質・能力が再確認され、その意義と果たす役割についてその可能性が示唆された。

キーワード：美術教育、学校段階接続、授業改善、主体的な学び、社会教育

I. はじめに

令和2年度に、中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領が完全実施になり、幼稚園教育要領・小学校学習指導要領も含め、各学校段階新学習指導要領に移行し2年目を迎えている。前回の改訂で美術教育においては「共通事項」が設定され、小学校図画工作と中学校美術のつながりが示された。今回の改訂では、変化の激しい社会を生きる力として、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの資質・能力の育成が、幼児教育から中等教育まで共通して示された。また、これらの資質・能力を「主体的、対話的で深い学び」という学びの中で培うよう、これもまた初めて授業改善に言及して示された。幼稚園教育要領に「幼児期の終わりまでに育ってほしい（10の）姿が示され、小学校学習指導要領では「スタートカリキュラム作成の義務化」が示された。つまり、各学校段階の円滑な接続と連続性及び各発達段階における主体的な学びを保障する授業改善が求められているのである。」

さらに新学習指導要領の実施と時を同じくして、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが世の中を包み込み、これまで当たり前に行われていたことを根本から見直す機会となった。これは、学校教育・社会教育にも大

きな影響を及ぼし、期せずして授業改善を行わざるを得ない状況を生み出した。

新学習指導要領施行に伴う授業改善と感染症対策というフィルターを通過してきた美術教育とは今どのような容（かたち）で、今後どこに向かっていくべきなのか。各段階学校教育、社会教育など多角的な視点から検証・共有するため本研究会を企画した。

II. 本研究会の概要

1. 主催 北翔大学北方圏学術情報センタープロジェクト研究美術研究グループ

山崎 正明	北翔大学講師
林 亨	北翔大学芸術学部教授
石川 早苗	札幌市立柏中学校教諭
岩崎 愛彦	千歳市立祝梅小学校校長
佐藤 初美	小樽市立青園中学校教諭
館内 徹	元札幌市立中学校教諭
八重樫善照	北海道札幌英藍高等学校教諭
湯浅 大吾	北翔大学教育学部准教授

2. 内容

美術教育を
多様な視点から捉え
これからの
教育を考える

北翔大学北方圏学術情報センター
美術研究グループ研究会
2022年10月9日(日)~10日(月)

■会場 北翔大学札幌円山キャンパス札幌市中央区南1条西22丁目1番1
■参加費 1000円(1日のみの場合も同様・学生は無料) バスツアー参加者は別途500円

幼稚園・小学校・中学校・高校・高等専門学校
大学・教育番組制作・社会教育・免許外美術担任
アートコミュニケーター・作家など様々な視点から
これからの教育を考える2日間

9日(日)

9:20 開場
9:50 子どもの作品等を前に
保育・授業実践交流

12:10 受付開始
(12:30 美術による学び学会総会)

12:50 開会

12:55 ミニ講演(2)、実践発表(8)

18:05 みんなで語ろう(18:45 終了)

10日(月)

9:00 実践発表
札幌円山キャンパス発(バス)

10:30 札幌円山キャンパス発(バス)

11:10 大地太陽幼稚園着(施設見学)
昼食(各自持参) みんなで語ろう

14:30 札幌芸術の森着

16:30 札幌円山キャンパス着・解散

●ミニ講演 上野行一(東京) 大杉健(東京)

●実践発表
更科結希(新潟) 阿部永(札幌) 野村幸伸(札幌)
下郡啓夫(富山) 札幌アートコミュニケーターズ(札幌)
山口一樹(夕張) 藤倉稔(下川) 佐貫巧(青森)
三浦真奈美(札幌) 野山雅司(札幌) 中山敦子(北広島)

■主催 北翔大学北方圏学術情報センタープロジェクト研究美術グループ 美術による学び研究会
■お問い合わせ 林 亨 thayashi@hokusho-u.ac.jp 山崎 正明 yamazakiMasaki@mac.com

(1) 1日目 9:50~11:50 保育・授業実践交流

発表者一覧(発表順)	
平井 宣子	札幌市立大麻東中学校
石川 早苗	札幌市立柏中学校
佐藤 初美	小樽市立青園中学校
湯浅 未佳	恵庭市立恵明中学校
大杉 健	武蔵野大学教育学部
湯浅 大吾	北翔大学教育文化学部
石塚絵里奈	利尻町立利尻中学校
光永 江里	札幌市立元町中学校
奥平真由子	NPO法人ポラーナ
佐藤 芹香	下川町立下川中学校
宮田 玲二	中標津町立広陵中学校
野村 幸伸	北海道札幌東陵高等学校

(2) 1日目 12:50~17:55 講演及び実践発表

発表者一覧(発表順)	
上野 行一	元帝京科学大学
更科 結希	北海道教育大学付属釧路義務教育学校後期課程
阿部 永	北海道教育大学付属札幌中学校
野村 幸伸	北海道札幌東陵高等学校
下郡 啓夫	函館高等工業専門学校
札幌アートコミュニケーターズ	
山口 一樹	夕張市教育委員会
藤倉 稔	下川町立下川中学校(数学)
佐貫 巧	八戸学院大学短期大学部
大杉 健	武蔵野大学教育学部

(3) 2日目 9:00~10:15 講演及び実践発表

発表者一覧(発表順)	
三浦真奈美	北海道教育大学付属札幌小学校
笹山 雅司	札幌市立かっこう幼稚園
中山 敦子	大地太陽幼稚園

(4) 2日目 11:00~14:00 大地太陽幼稚園見学会

(5) 2日目 14:40~16:30 札幌芸術の森見学会

Ⅲ. 研究会の報告

1. 保育・授業実践交流

前回の研究では、子供の学びが見える「造形表現・図工・美術の時間展」という作品展を開催した。今回は、その考え方をベースに題材(作品)の持ち寄りという形にし、発表者の事前準備がいらぬ作品交流・実践交流を試みた。時間と労力の節約のために作品は展示するのではなく、床や机に並べることを基本とした。作品(未完成でも良い)交流は、クラス全員を基本とした。これは、いわゆる優秀な作品の持ち寄りを避けるためである。また、授業に関連する写真やワークシートなどの学びの過程が見える補助資料や授業をポスターにまとめたものを可能な範囲で持ち寄ってもらった。これらは、前研究の成果である、作品主義ではなく授業や子供の学びにフォーカスした交流を実現するためである。



発表は主に北海道内の中学校や高等学校が中心となったが、中には道外の大学で実践された小学校生の作品と大学生がつながる実践や美術館が近隣にない学校のための道立の美術館が所有する作品を基にした支援ツールの紹介、自然体験活動や芸術文化活動を企画・運営するNPO法人の発表など、多様な美術教育実践の交流を深めることができた。

授業改善という視点では、数年に渡るコロナ禍が日々の実践に影響を与えていることを物語る実践発表があった。「マスクを外せない」「外したがる」中学生がい

中、「自画像を描く」という意味について再考し、題材として扱うことをやめるという決断に至ったという発表である。教員が「子供のために」と「当たり前」に実践していたことが、「当たり前」に実践できなくなったことを契機に、「子供のために本当に必要なことは何か」を改めて考えることの価値を問い直す実践発表であった。

実践発表に対する意見交流では、子供の作品を教師のイメージに近づけさせることも、知らず知らずに行っていることかも知れないという指摘や、よくある題材でも制作の過程を大事にして行くことで変わって行くのでは、と言う授業改善につながる提案がなされた。



2. 講演及び実践発表

(1) 講演「NHK高校講座「美術I」の制作裏話」

美術による学び研究会代表 上野行一



2021年度より放送されている「NHK高校講座「芸術（美術1）」の番組制作について、現場教員の立場に立ちより充実した美術教育が実践されるための番組づくりについての内容であった。

案出1としては、現場の教員が年間指導計画を作成する際の手がかりとなるよう全20回を構成した。1年間で20回の講座が、隔週で5年間に渡り繰り返し放送されるということで、NHKのプロデューサーとは今後の美術教育の先を見据え、企画段階から話し合いを詰めていった。第1回の「アートって何？」から始まり第20回「こ

れからの美術」で終わるこの番組は、各回の企画、作品選定、著作権確認などを含め、1回分の番組制作に4ヶ月ほどかかるため、最高8回分の番組が同時進行していることになった。ディレクター3人に対し1人で対応したため、かなり大変であった。

案出2として、番組のホームページから「学習メモ」を入手できるようにしており、多くの学校で活用してもらえるようになった。

案出3として、番組の中に1分鑑賞を設定した。美術教育は表現と鑑賞から資質・能力を育む教科であるが、表現に重点が置かれがちな現状を補完するためである。作品選定にはジェンダーやSDGsを含め多くの要素を踏まえた上で、バランスを考えかなり時間をかけた。

より良い番組制作の過程報告であったが、最後発の新学習指導要領の実施における高等学校教育現場での授業改善、カリキュラム作りに資する取り組みともなっていた。

(2) 「これからの美術教育について考えていること」

武蔵野大学教授 大杉 健



予見1美術教育について。多様性を原動力とし、資質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが大切である。AIが進化しても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間のもっとも大きな強みである。

予見2教師の役割について。1番は個に応じた声掛けである。タイミングも意識しながら一人一人の違いや良さを見つけていくことがより大切になってくる。次に、「拡張する」ことである。研究会や他の先生、他の組織など色々なところでつながっていききたいものである。つながりながら、プロジェクトを生み出していくということも大切である。また、題材については、作品や多様な表現活動を通してコミュニケーション、コラボレーション、STEAMとの連携も視野に入れて考えていく必要がある。

予見3鑑賞の授業について。鑑賞対象を身近に感じさせることが重要である。対話や作品の力を借りて、子供は自在に見て、表現をしていく。様々なものを対象に多言語鑑賞会、クイズ形式、ネットの活用など対象者や場所などに応じて、工夫をしていくことが可能である。

最後は、ポリチューブを使った造形遊びを参加者全員で体験することを通して、美術教育における教材化の広がりや可能性は無限であることが再認識された。

(3) 「ICT活用の現状と課題 そして、これから」

北海道教育大学附属釧路義務教育学校後期課程教諭

更科結希



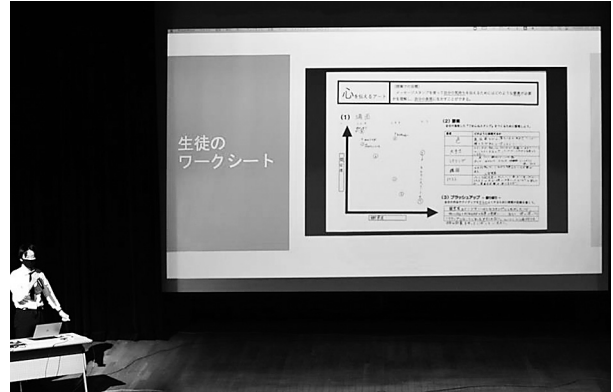
更科氏は、早くからICTに取り組んでおり、豊富な事例を基にICTがひらく可能性を示唆した。

釧路義務教育学校では、2012年度よりiPadが導入されていたが、検索や撮影中心でデータの収集という面ではあまり機能していなかった。しかし、令和3年開始のGIGAスクール構想により生徒全員にタブレットが支給されたことをきっかけに、これまで行っていたことの他に、意見や作品の共有及びやりとり、配信などを実践し、他校との交流も行うことができるようになった。今回紹介したマスキングテープを使用したvisual illustrationの実践では、タブレットを使用することで、作品への生徒の意見をいっしょに回収することができ、生徒が他者の意見を視覚的に受け取ることができ、様々な見方や考え方に触れることができるようになった。特に、制作経過を画像で撮影することで毎時間の振り返りがより深いものとなったことが重要な点である。また、プログラミングでタブレット内に模様動画を作成することや、教師が美術館にカメラを持って入り生徒に向けて配信し生徒が鑑賞するなど、様々な実践を試みている。ICTがあるからこそできる授業を通して、新たな学びの関係を提供することを今後も継続していきたいと思う。同時に、地域を越えたつながりもICTがあれば可能であると考えている。

ICT活用により、美術教育がよりひらかれていく可能性が具体的に提案された。

(4) 「メッセージスタンプを通して考えるデザインの授業」

北海道教育大学附属札幌中学校教諭 阿部 永



阿部氏は、コロナ禍で変化していく子供たちの課題について考え、この子供たちに必要な力とは何なのかを模索し、題材を工夫して取り組んだ実践を発表した。「自分の意見をうまく伝えられない(場の空気を壊したくない)」「オンラインでの交流が多くなり、それが(直接のコミュニケーションより)主流となる機会が増えた」という実態を受け、題材設定を試みた。2年生では、SNSで使われる【スタンプ】の制作を通して、伝える相手や受け取った側の感じ方について生徒同士で交流し、「伝える相手」は自分にとってどんな人なのか考え、「伝わる情報の曖昧さ」に気付きながら「感謝」「謝罪」「待ち合わせ」などの場面を設定し、よりよく自分の気持ちが伝わるための工夫について思考・判断していく授業を実践した。3年生では他者のためのデザインとして、【卵を運ぶためのパッケージデザイン】について考える題材を設定し、誰もが「安全に」「安心に」「受け取る側が嬉しくなる」デザインを考える授業に取り組んだ。「他者の気持ちや感じ方の違いに気づき、コミュニケーションをよりよく行うこと」を大事にしている授業作り実践された。

阿部氏の思春期という子供の心理、かつコロナ禍という子供の心理に寄り添い、他者・コミュニケーション・相手意識をキーワードに構築された題材作りは、授業改善の一つの視座を示している。

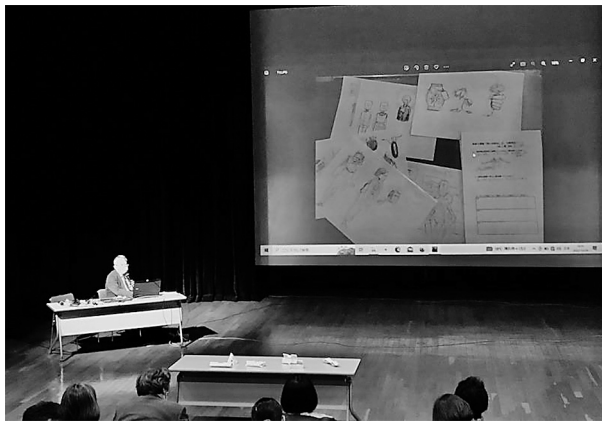
(5) 「高校美術の現場から」

北海道札幌東陵高等学校教諭 野村幸伸

野村氏は、おといねっふ美術工芸高校など、これまで勤務してきた学校と現在の勤務校での実践を発表した。実践報告で示された授業づくりは、作品の制作を通して

「自分の考えを実現する（形にする）」という課題を持たせることを主眼に置いて進めている。「答えを自分で見つける」ために、制作の道筋を考え、その取り組みをワークシートに記録し、「試作」⇔「失敗」を自分自身が振り返り、制作を通した「自己評価」（プレゼン）をすることで、制作者自身が学習を深め自分にフィードバックしていく様子が具体的な事例を持って説明されていた。制作の過程で評価しつつ、助言を交え、一人一人に寄り添いながら制作の道筋を示していくというという教師の支援の在り方が示された発表であった。

なお、午前中の実践交流会の会場に、野村氏の授業での生徒の学びの過程が展示されており、本発表で示された授業の意図が具体的に参会者に理解されていた。



(6) 「高等専門学校における教科横断の取り組み」

北海道函館工業高等専門学校一般系
教授 下郡啓夫



下郡氏の実践報告では、一般社団法人千總文化研究所と共同開発したプログラムでの授業の様子を追いながら、教科の枠を超えた学習の様子が発表された。「着物」という題材を基に、表面的な美しさだけでなく、描かれている図柄の草本、自然環境や季節感、歴史的な背景や文学とのつながりなど文化的な価値にも思いを寄せ、「物を作る」前段階の学習を深め、実際に着物に触れながら「形・色彩・線」など細部の鑑賞、職人の方と

のワークショップでの友禅染の染料作りなどを通した技術的な知見など、多面的に学習を深めていく様子が発表された。

教科横断の取り組みにあたって、様々な教育資源を徹底的に活用しての授業づくり構造が発表された。なお授業作りでは、構成型ジグソー法などを取り入れたことを紹介しながら、高等教育における授業の作りについても具体的に報告された。

(7) 「札幌アートコミュニケーターズの活動

～アートを紹介してコミュニケーションの場をつくる」

札幌アートコミュニケーターズ 山際 愛



SCARTS (Sapporo Cultural ARTES Community Center) アートコミュニケーター1「ひらく」は、札幌市民交流プラザを拠点に、「ひと・もの・ことをつなぐ。創造性の光をむすぶ。」をミッションとして活動しています。講師にはアーティストや文化人もおり、芸術に関わる専門スタッフとともに、「市民とアートのつなぎ手」として活動している。

SCARTSでの実践・活動報告

1. 学んだこと・学びを活かす

(1) 3年間の講座で「学んだこと」？コミュニケーションのさまざまな技術・対話による鑑賞・鑑賞レポートやインタビューなど活動の記録の仕方「ワークショップのつくり方」

(2) 実践で「学びを活かす」

- ・作家の作品展に関連したワークショップ・対話による音楽鑑賞などの実践・「ひらくだより」発行・作家さんのインタビュー記事をWEBで発信・「札幌芸術の森」の展覧会で対話による鑑賞やワークショップの実践

2. 「ひらく」から卒業後は「札幌アートコミュニケーターズ」として実践

- ・本郷新記念札幌彫刻美術館において動画による作品紹介やフレームを使った彫刻鑑賞・夕張市で対話による鑑賞。

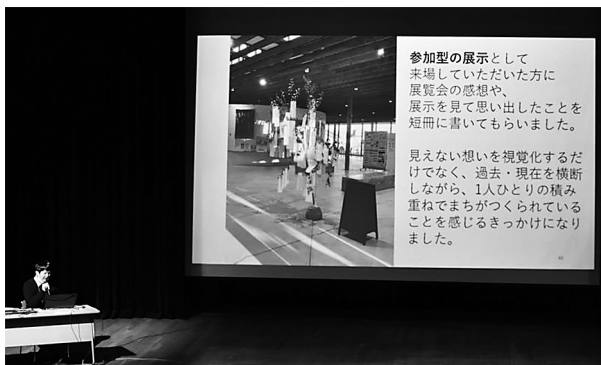
最後に、「札幌アートコミュニケーターズ」は子供から大人まで、アートを通しては、アートや人とつながることを大切にしたい。



以上、専門講座を受講し専門性を高めた市民が、一般市民とアートを繋ぐという取り組みについて報告がなされた。

(8) 「変貌するまち・ゆうばりの基礎体温をぐぐっと上げる」

夕張市教育委員会 山口一樹



人生100年時代に応える「地域の文化施設×美術」実践のポイント・心構え

1. これまでの実践について

社会教育主事として、「一人一人が潤いを感じながら、自分を知り、自分を大切にすることが重要だ」と考えている。

文化・交流の拠点として2020年に建設した「拠点複合施設りすた」は、赤ちゃんから高齢者まで様々な人々が学べる場としての施設であり、主に市民が制作などの活動を通じて、自分と向き合い、よりよく生きることに重点にし、「ケア」としての教育の在り方を考えている。「りすた」は待合交流スペース、多目的ホール、ギャラリーなどで市民活動の相談や支援を行い、知らなかったことや珍しいことに出会える施設になっている。旧夕張市美術館収蔵作品展のような規模の大きな展覧会や高齢者学級、各種講座、市民文化祭も行った。活動では対話を大切にしている。それは自己の物語を再構成したり、気付かなかった要素が加わったりするからである。具体的には「活動後の対話の場の設置」「哲学カフェ」「対話

による美術鑑賞」「感想を書いた掲示板の設置（見えない想いの視覚化）」

2. コーディネーターとして考えていること

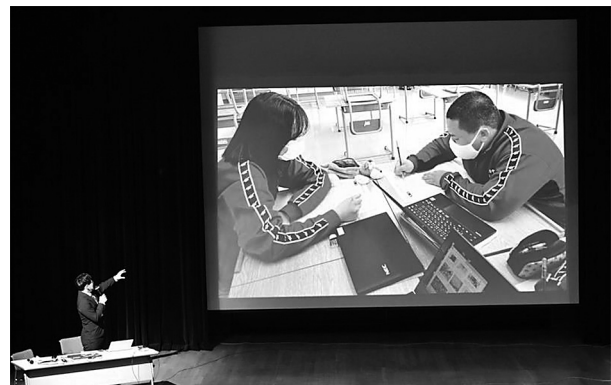
これらの事業を立案する上で、次の3点を大切にしている。

- ・「質」にこだわらず「手作り」で参加できるようにする。ついでに施設の弱みを補完する。
 - ・様々な能力やアイデアがある人たちと「協働」して事業を実施する。
 - ・「まちの誇り」を確認できるようにする。ここにしかない「味わい」を大切にしている。
- 今後大切にしたい視点は次のものである。
- ・多様な生き方をする参加者について知り、配慮するためにライフコースに沿っているのかを点検。
 - ・生き方や考え方にふれるきっかけづくり。
 - ・未知を発見するおもしろさに触れる場づくり。
 - ・価値観のゆさぶり、新しい考えの受け止めのため、逃げ道や抜け道にもなる「学び」・多様な支援が可能となる学際的なコーディネーター。

以上、地域を活性化させるコンテンツとして、美術の力を活用する、行政からの視点での報告がなされた。

(9) 「免許外で美術の授業の授業を担当して」

下川町立下川中学校教諭 藤倉 稔



数学が専門の中学校教諭、藤倉氏の報告。

「現在「スクールヴォイスプロジェクト」という学校の課題を現場の声で変えていく取組に参加している他、「授業づくりネットワーク」の理事もしている。コロナ禍の制限だらけの中で、いま、学校現場に一番必要なのは、子供と先生が楽しく過ごす学校生活を取り戻すことではないか。そのような学校・学級・授業をどうやってつくっていくか。そのため「学校にプレイフルを取り戻す！」ことをキーワードに訴えている。

今年度から美術の授業に取り組んでいるが、「学校にプレイフルを取り戻す！」ために多くの示唆を受けている。実際に取り組んだのは山崎氏の提案している題材が

中心である。「自分の目標」「今、自分が生み出す色と形」「動きのある美しい形」「人の心を動かす形」などである。半年取り組んでみて気がついたことは次のようなことである。

- ・新たな画材に触れるときは「試す場」をつくった。試す中で「こんな作品にしたい」がつけられ、また考え抜いた結果としての表現になるのだということがよくわかった。
- ・作品に取り組む中で他の人のアイデアや表現方法にふれ、それを参考に自分流の表現にしていく姿も見られた。答えが一つではない美術のよさだと言える。
- ・「人の心を動かす」という題材では自分が表したテーマについて生徒同士の対話の中に、「これ、どうだろう？」など、素直に他者の見方や感じ方を交流する姿が生まれていた。生徒一人一人が何を大切にしているからが見えてきた。数学の時間では気が付かなかった生徒のよさがたくさん見えてきた。そして、今、アートは「ちがい」との出会いでもあると実感している。

以上、免許外で美術を担当することを通して、美術の良さを知り、自身の課題解決に活用している取り組みについての報告がなされた。

(10) 「子供のための芸術教室「アートイズ」が目指すもの」
 戸学院大学短期大学部 准教授 佐貫 巧



「アートイズは、青森県八戸市を拠点としたアート教室で、画家、歌手、幼稚園教諭等で構成されている。子供が本来もっている発想力を引き出し、創造と表現の「楽しみ方」を学ぶ教室である。アートには正解はなく、自分で選び取って正解とする力や根拠のないものを信じる力が大切であり、「心の温度」に寄り添い、アートを通して少しでも生きやすい世の中をつくりたいと考えている。

十和田市現代美術館（美術館普及プログラム）では、レアンドロ・エルリッヒ《建物？ブエノスアイレス》の

作品を使い身体表現のワークショップを実施した。住民の人物設定をし、なりきりながら鏡に映る姿を意識して動いていく実践である。

震災後の岩手県、宮城県では、アートで子供たちの笑顔をふやそうと、アーティストを呼んで様々なアート活動を行った。

是川縄文アートプロジェクトでは、公園の壁の原画を子供から公募し、壁画ペイントワークショップやオープンセレモニー、グッズ制作を通し、地域の活性化にもつなげている。

地域の中で、子供たちがどんな未来を歩いていくのか、自分たちが何を引きついでいくのかを見つけていくためにも、アートが必要と実感している。

以上、アーティストと教員が芸術を通して、子供たちや地域の活性化に資する取り組みについての報告がなされた。



(11) 「小学校図画工作「光による造形遊び」」
 北海道教育大学附属札幌小学校 教諭 三浦真奈美

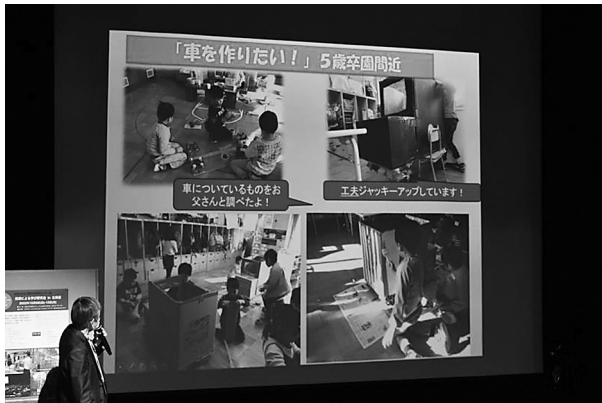
「小学校の図画工作科における造形遊びは、「遊びを通した学び」として定着しているが、一方、札幌市内での調査では、学年が上がるにつれ実施率は低下し、6年生では30パーセントに留まることが報告されている。そんな状況下、三浦氏は高学年においても造形遊びを積極的に取り入れ実践を重ねている。5年生では色付きのLEDライトを様々なものに投光し、壁や床にできる影の形や色にイメージを広げ、そこで得た学びを基に、6年生ではハンディプロジェクターを利用したマッピングへと発展させている。子供たちは目の前で起きる光と影、色の変化を仲間と共に楽しみながら、協力して更なる効果的な手法を追求して行った。これらの実践の中で、美術や図画工作には「遊びを通した学びの要素」が含まれていることを再確認している。

以上、高学年における造形遊びの意義について、実践を通して報告された。



(12) 「保育ドキュメンテーションの取り組み」

札幌市かっこう幼稚園 園長 笹山雅司



「人工知能“AI”が急激に進化する未来、私たちの生活は「身体を使うこと」、「考えること」、「人と関わること」の3つのことをしなくなるのではないか、との危機感を抱き、笹山氏は、幼児期の「あそび」を通してこそ、それらの能力が培われることを信じ、「あそび」の重要性について広く園長という立場で伝え続けている。「保育ドキュメンテーション」は、園内で日常に起きる様々な出来事を、写真や文字を構成して仕上げる「保育の記録」である。これを見ることで、一目で何が行われているのかが伝わるようにしている。この「保育ドキュメンテーション」は、登降で園に来られる保護者にも玄関風除室に掲示をして伝えている他、幼稚園のホームページにも掲載している。ドキュメンテーションを閲覧することで、日々の活動を知ることが可能となり、子供の成長を実感しながら幼稚園への理解も深めて行くことになる。

以上、保育現場で取り組みが進められているドキュメンテーションの意義について、実践を通じた報告がなされた。

(13) 「生活・ひらめき・創造」

大地太陽幼稚園 園長 中山敦子



「大地太陽幼稚園は、札幌市に隣接する北広島市において、自然豊かな広大な敷地を利用した「自然体験」や様々な「造形体験」を通して、子供の主体性と他者との関わりを大切にしながら、一人一人の将来に向けた「底力・根っここの力」をつける教育を目指している。元気いっぱい駆け回れる広い園庭の一部には、たくさんの野菜が実る畑や水田（田んぼジオトープ）もあり、子供たちは生育に関わったり、収穫した作物を園内のレストランなどで調理して食事したりする体験を通して、食べ物がどうやって自分たちの口に届くのかを知っていく。また、冬はスキーや雪を素材とした造形体験など、一年を通じてその季節ならではの多くの体験活動が行われ、園内は常に子供たちの歓声で溢れている。

以上、造形体験を重要視している保育の実践報告がなされた。



3. 美術教育充実のための現地視察

(1) 大地太陽幼稚園視察

大地太陽幼稚園は、1997年に創立された北広島市にある幼稚園である。創立者である理事長、坂本行正氏は、「教育はデザイン くらしは芸術」を信念とし、「自然芸術の幼稚園づくり」を実現するため、札幌近郊を探し「太陽の丘」と名付けられた原生林が隣接するこの土地



に大地太陽幼稚園を設立した。

当日はあいにくの雨模様であったが、理事長、中山園長、前園教頭、佐藤麻衣主任、で栄養士の武居主幹教諭が温かいコーヒーで出迎えてくれた。中山園長がこの日のために「大地太陽ドキュメント」という冊子を作成し配布してくれていた。

「美的感動教育」の理念の通り、園舎の壁一面には余すところなく子供の作品が展示されていた。園長が、子供たちの絵画表現の成長をスクリブルという表出から表現に成長する過程を1枚1枚丁寧に説明してくれた。また園内の作品にも目が惹かれたが、それだけではなく、小さな作品や数々の写真が展示され、その時の子供の思いが伝わるように工夫されていた。このように子供たちにとっても保護者にとっても成長が可視化されていた。今年度は敷地内に田んぼを作り、初めて稲作にチャレンジしているとのことであった。そこがビオトープとなり、カエルや水生昆虫、オニヤンマなど多様な生き物がやって来て子供たちの様々な発見やWODERの生まれる場所になっていた。それらが表現へのつながっているようであった。正に「大地と太陽の保育」の教育テーマが具現化された魅力的な環境を実現していると感じた。

園では50種類以上の野菜や果物を栽培していて、子供たちが育て収穫したそれらを食材とした給食が提供されているとのことであった。参加者にも、ジャガバターやとうもろこしを乾燥させ調理したポップコーン、子供たちが大豆から作った味噌汁などを振る舞ってもらった。季節に合わせた「衣食住」のテーマの通り、その場その時の生活文化がそのまま遊びに、学びにつながる保

育実践が実感された。

敷地内にある「森の家保育園」の屋根は緑化されており、森のリスが運んだのか、草花の他にドングリの木が生えていた。森の中には、ツルが自然のブランコになっていて、参加者も実際遊んでみた。 _

数年前に来園した時よりさらに施設環境が拡充されており、理事長先生、園長先生の理想の追求は終わりがなく、今後も進化を続けていくことであろう。

(2) 札幌芸術の森美術館視察



札幌芸術の森美野外美術館での作品鑑賞は残念ながら雨天のため中止して、当日行われていた企画展（北海道の建築展2022）を個別に鑑賞することになりました。ゆっくりそれぞれのペースで鑑賞しました。

IV. おわりに

今回は、「美術教育を多様な視点からとらえ、これからの教育を考える」ことをテーマとした研究会にした。ITの急速な進歩による生活の変化や少子高齢化による地方の疲弊、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる当たり前の日常の喪失。そんな子供たちを取り巻く状況を「美術の力」で変えていこうとする、多様な立場からの実践報告が交流・共有され、多様な視点から今後の美術教育の在り方について考えることができた。VUCA（未来の予測が難しい状況）の時代と言われる今、だからこそ、多様な視点で、様々な知恵を集めながら、未来を見据えた「美術による学び」について考えていくことが大切になってくる。